り。又難なくして、王法に御帰依いみじくて法をひろめたる人も候。これは世に悪国・善国有、法に摂受・折伏あるゆへかとみへはんべる。正像猶かくのごとし。中国又しかなり。これは辺土なり。末法の始なり。かゝる事あるべしとは先にをもひさだめぬ。期をこそまち候つれ是。この上の法門はいにしえ申をき候き。めづらしからず。

円教の六即位に観行即と申は、「所行如所言、所言如所行」と云云。理即・名字の人は、円人なれども言のみありて真なる事かたし。例せば外典の三墳五典等は読人かずを知らず。かれがごとくに世ををさめふれまう事、千万が一もかたし。されば世のをさまる事も又かたし。法花経は紙付に音をあげてよめども、彼の経文のごとくふれまう事わかたく候か。〈譬喩品に云く、「経を読誦し書持することあらん者を見て、軽賤憎嫉して、結恨を懐かん」と。法師品に云く、「如来の現在すら猶お怨嫉多し、況んや滅度の後をや」と。勧持品に云く、「刀杖を加え、乃至、数数擯出せられん」と。安楽行品に云く、「一切世間に怨多くして信じ難し」と〉。此等は経文には候へども、何世にかゝるべしともしられず。過去の不軽菩薩・覚徳比丘なんどこそ、身にあたりてよみまいらせて候けるとみへはんべれ。現在には正像二千年はさてをきぬ。末法に入ては此日本国には当事は日蓮一人みへ候か。昔の悪王の御時、多の聖僧の難に値候けるには、又所従・眷属等、弟子壇那等いくそばくかなげき候けんと、今をもちてをしはかり候。今日蓮、法花経一部よみて候。一句一偈に猶受記をかほれり。何況一部をやと、いよ〳〵たのもし。但をほけなく国土までとこそをもひて候へども、我と用られぬ世なれば力及ばず。しげきゆへにとどめ